

20 共用試験臨床実習前 OSCE ^{*1}

高田 清式^{*2}

はじめに

従来 OSCE (Objective Structured Clinical Examination) は, CBT (Computer Based Testing) と並んで, 臨床実習開始前の学生を対象とした評価の一つであったが, 2015 年の医師国家試験改善検討部会報告を基に, 臨床実習終了時においても OSCE が導入されることとなり, 令和 2 年度から正式に臨床実習終了時の OSCE が全国共通で実施された。そのため OSCE と一括りにされていた実技試験を, 臨床実習前 OSCE (Pre-Clinical Clerkship OSCE, Pre-CC OSCE) と, 臨床実習後 OSCE (Post-Clinical Clerkship OSCE, Post-CC OSCE) と分けて取り扱うことになった。さらにこの臨床実習前 OSCE は令和 5 年から「公的な試験」となることが法的に規定された。本稿では臨床実習前 OSCE を取り上げ, 特に断りがなければ, OSCE とは臨床実習前 OSCE を指し臨床実習後 OSCE については別項を参照頂きたい。

臨床実習前 OSCE 導入の背景

1987 年に文部省による「医学教育の改善に関する調査研究協力者会議」は, 医学生が診療チームに参加する臨床実習などの導入を提案した¹⁾。一方で医行為について, 1991 年に厚生省の「臨床実習検討委員会」は, 「医学生が診療に参加し, 医行為を行っても違法でない」と解釈することができる 4 つの条件」として, 侵襲性の高いこと, 指導医の監視, 事前の医学生の評価, 患者の同意を提言した²⁾。

この中の「事前に医学生の評価を行う」手段として, 2001 年に文部科学省の「医学・歯学教育の在り方に関する調査研究協力者会議」は「大学間の共用試験システム」を提案し³⁾, 大学間共同で質の高い一定の進級基準, 診療参加型実習の実質化の促進が報告された。

この報告を受け, 2001 年に第 1 回共用試験 OSCE トライアルが 12 大学で実施された。あわせて, 2002 年に CBT 及び OSCE を実施する組織として, 全国医学部長病院長会議内に任意団体である共用試験実施機構が設立された。共用試験実施機構は医歯学教育システム研究センターと協力し, 2002 ～ 2004 年に計 4 回のトライアルを実施した。2005 年に共用試験実施機構を母体として社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構 (以下, 機構) が設立され, 2005 年 12 月から始まった「2006 年度共用試験 OSCE」の正式実施から現在に至るまで, OSCE を実施している。

臨床実習前 OSCE の概要

現在 (2021 年 11 月) では, 2021 年度 OSCE として, 2021 年 8 月第 3 月曜日～2022 年 3 月 31 日にかけて, 全国 82 医科大学・医学部で実施されている。受験生は 4 年生が中心であるが, 一部の大学ではカリキュラムに応じて 3 年生が受験している。

医学教育モデル・コア・カリキュラム (平成 28 年度改訂版) に準拠して「診療参加型臨床実習に参加する学生に必要なとされる技能と態度に関する学修・評価項目」 (以下, 学修・評価項目) が作成され, それに基づき課題及び課題に関連する各種資料が作成されている。

各大学は学修・評価項目を参考に事前に医学生の教育を行う。臨床実習前に, 各大学は CBT と OSCE を当該学年の医学生に課し, 進級要件

^{*1} Pre-Clinical Clerkship Objective Structured Clinical Examination

^{*2} Kiyonori Takada 愛媛大学医学部附属病院地域医療支援センター

の一つとなっている。

OSCE では、医療面接・全身状態とバイタルサイン・頭頸部・胸部・腹部・神経・四肢と脊柱・基本的臨床手技・救急の9つのステーションから最低6ステーションをすべての受験生が受験する⁴⁾。医療面接は10分間、その他のステーションは5分間で模擬患者もしくはシミュレータを対象に実技を行い、態度や実技について2名以上の評価者がチェックリストを用いて評価する。OSCE 当日には、受験生の評価を自大学の評価者と一緒に行う「外部評価者」と、試験全体の監督を行う「機構派遣監督者」が機構から派遣され、試験の公平性や透明性を担保している。

実施後は、総括試験として各大学で可否を決定し進級判定の評価に用い、同時に各大学は受験生の成績を集計し機構に送り、機構は統計処理後に解析結果を各大学へ返送する。不合格者の基準や不合格者に対する再試験の有無については、各大学が独自で決定するが、今後公的な試験となれば可否は国に委ねられる見込みである。なお、再試験は大学が独自で実施しているが、2021 度から追試験を行う場合は機構に通知し、本試験と同じステーション構成で（本試験と異なる課題が原則）機構から機構派遣監督者を派遣することと規定した。

また、各大学の担当者及び受験生全員を対象とした調査が実施され、それらの分析結果は、OSCE システムの改善や次年度の課題の改訂などに利用される。CBT 及び OSCE に合格した受験生には全国医学部長病院長会議から Student Doctor 認定証が授与される。機構は、OSCE 課題の提供のみならず、実施全般に関する運営を行い、全国データの集計や各大学からの問い合わせ（Q&A）に常時対応している。なお、本稿では各課題を昨年度までと同様「ステーション」と名付けているが、今後は「課題領域」などへの名称変更が予定されている。

学修・評価項目

機構は、毎年の OSCE 実施に先だって、学修・評価項目を改訂し、各大学及び受験生に周知している。医学系 OSCE 事後評価解析小委員会

及び同小委員会の下部に課題改訂専門部会と学修・評価項目等改訂専門部会が組織され、2020 年度の OSCE からは医学教育モデル・コア・カリキュラム（平成 28 年度改訂版）に基づいて教育を受けた医学生に向けて、学修・評価項目を作成している。臨床実習前 OSCE および診療参加型臨床実習で必要とされる技能と態度がカバーされている。

また、医学生が臨床実習中に学修し、卒業時には身につけておくべきだが、臨床実習前には備わってなくても良い項目については、※印をつけて明示している。

学修・評価項目の作成に並行して、実際の手技の習得のために受験生向けの「教育・学修用 DVD」が作成され、映像教材として広く利用されている。

OSCE 課題及びステーションの運営

課題は学修・評価項目に基づいて、医学系 OSCE 事後評価解析小委員会及び課題改訂専門部会、学修・評価項目等改訂専門部会が、前年度の全国集計データや機構派遣監督者及び外部評価者からのフィードバックなどを見直して、新規課題の作成や、旧課題の改訂などを行い、毎年度更新して作成している。

現在は医療面接・全身状態とバイタルサイン・頭頸部・胸部・腹部・神経・四肢と脊柱・基本的臨床手技・救急の9つのステーション課題から最低6ステーションをすべての受験生が受験する。ステーション内では、評価者（採点者）である教員に加え、模擬患者や運営補助者が待機し、OSCE を運営している。また、受験生の待機場所や通路などが事前に設定され、事務職員などの運営者が厳正な試験を支えている。なお、2022 年度からは公的化の面も踏まえ、課題数に関しては現行の最低6課題から8～12課題を課すことが検討されつつある。

認定評価者・外部評価者・機構派遣監督者

共用試験としての OSCE の実施や採点（評価）を標準化し、公平性や透明性を担保するために、機構は医学系 OSCE 実施小委員会及び外部評

評価者認定専門部会が、基本的事項と評価の手順を教育する評価者認定講習会を開催し、ステーション単位で「認定評価者」を認定する。認定評価者は自大学の臨床実習前教育について中心的な役割を担うことが期待される他、自大学において OSCE の担当ステーションの中心的な役割を担うとともに、外部評価者として他大学の OSCE においても評価を担当する。

一般的には、異なるステーションに一人ずつ、計 6 名の外部評価者が、各地域単位でグループ化した他大学から機構を通じて派遣される。外部評価者は派遣された大学で、他の内部評価者と同様に受験生の評価を行う。

機構は、共用試験 OSCE に関係する委員会の中から機構派遣監督者を指名し、各大学の OSCE に派遣する。機構派遣監督者は派遣された大学で、OSCE の当日の準備から終了まで、当該大学における OSCE について観察し、また関係者と打ち合わせをし、危機管理を踏まえ OSCE が適切に実施されていることを確認する。

模擬患者

模擬患者は、医療面接模擬患者とその他のステーションにおける模擬患者に分けられる。医療面接模擬患者は、事前に患者シナリオを把握した上で、OSCE 当日には受験生の質問に応じて標準的に回答する必要がある、特別な訓練が必要である。多くの大学では、学内で医療面接模擬患者を独自に養成するか、模擬患者の経験が豊富な模擬患者団体に依頼するなどして、医療面接模擬患者を準備している。機構では医療面接模擬患者の標準化を図っているが、別項を参照されたい。

医療面接以外のステーションにおける模擬患者は、多くの大学では上下級の医学生もしくは他学部の学生や事務職員が担当している。

OSCE データ解析

医学系 OSCE 事後評価解析小委員会は機構の集計データをもとに、継続的に OSCE の分析を行っている。これらのデータは各大学に報告される他、各種委員会における活動に反映されている。

新型コロナウイルス感染への対応

機構は、2020、2021 年度に新型コロナウイルス感染症蔓延への対応として、臨床実習前 OSCE 実施小委員会から「医学系共用試験実施における新型コロナウイルス感染症対策について」の冊子を発行し、課題選択や外部評価者の派遣の中止等を規定した当該年度限りの特別処置を認め、感染下での円滑な試験の遂行に努めた。

おわりに

臨床実習前 OSCE が正式実施となり 15 年が過ぎた。公的化を見据えつつ、診療参加型臨床実習の充実や卒前卒後におけるシームレスな教育を円滑にするため、2021 年度 9 月より臨床実習前と臨床実習後 OSCE の各種委員会が統一された。全国の大学で、より充実した医学生教育が行われることが期待されている。

■文 献

- 1) 医学教育の改善に関する調査研究協力者会議報告書。文部省。1987 年。
- 2) 臨床実習検討委員会最終報告書。厚生省。1991 年。
- 3) 医学・歯学教育の在り方に関する調査研究協力者会議最終報告書。文部科学省。2001 年。
- 4) 公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構。「共用試験ガイドブック」第 19 版(令和 3 年)。2021 年。